

Pavane For A Dead Princess

亡き王女のためのパヴァーヌ

Steve Kuhn Trio

スティーブ・キューン・トリオ

- アイム・オールウェイズ・チェイシング・レインボーズ** I'm Always Chasing Rainbows ~ Fantasy Impromptu { F. Chopin } (7 : 22)
- 亡き王女のためのパヴァーヌ** Pavane For A Dead Princess { M. Ravel } (6 : 26)
- ムーン・ラブ** Moon Love ~ Symphony #5 2nd Movement { P. Tchaikovsky } (6 : 49)
- ワン・レッド・ローズ・フォー・エバー** One Red Rose Forever ~ Ich Liebe Dich { E. Grieg } (5 : 32)
- 白鳥の湖** Swan Lake { P. Tchaikovsky } (6 : 09)
- 夜想曲変ホ長調 作品9, 第2番** Nocturne In E Major Op9, No2 { F. Chopin } (6 : 38)
- リベリイ** Reverie { C. Debussy } (8 : 09)
- 前奏曲ホ短調 作品28, 第4番** Prelude In E Minor Op28, No4 { F. Chopin } (5 : 43)
- フル・ムーン・アンド・エンプティ・アームス** Full Moon And Empty Arms ~ Piano Concerto #2 3rd Movement { S. Rachmaninov } (6 : 51)
- パヴァーヌ** Pavane { G. Faure } (6 : 32)
- ララバイ** Lullaby { J. Brahms } (3 : 37)

スティーブ・キューン Steve Kuhn (piano)

デヴィッド・フィンク David Finck (bass)

ビリー・ドラモンド Billy Drummond (drums)

録音 : 2005年8月18、19日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at The Studio in New York on August 18 & 19 , 2005.
Engineered by Katherine Miller.
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover : © The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P.Tokyo.
Artist Photo : John Abbott. Designed by Taz.

演奏紹介

- アイム・オールウェイズ・チェイシング・レインボウズ

多くのジャズ・ミュージシャンがクラシックのジャズ化を試みてきたが、この演奏は中でも極めて秀逸だ。原曲のメロディをジャジーな装飾音と和音を用いてキューンが独自の音楽にしてみせる。まるでオリジナルのように、彼はこの演奏に馴染んでいる。天才ショパンが聴いたら一体何と云うだろうか。これ1曲でアルバム成功が確信できるほど素晴らしい内容だ。その後登場するデヴィッド・フィンクの大胆なソロも、クラシックだからという遠慮は微塵もない。この堂々たるプレイも痛快だ。最後はキューンとビリー・ドラモンドの小節交換があって、演奏はエンディングに向かう。

- 亡き王女のためのパヴァーヌ

モリス・ラヴェルがバリ音楽院在学中の20歳のときに書いたピアノ曲で、スペインに起源を持つと言われる宮廷舞曲「パヴァーヌ」による主題を用いたもの。音の魔術師と呼ばれたラヴェルはみずから1910年にオーケストラ用の編曲を書き、それによって管弦楽の名曲としても親しまれるようになった。ジャズ・ミュージシャンが好んで取り上げるクラシック曲のひとつだが、そうした傾向が顕著になったのは1970年代以降のことである。キューンはこの曲を、バラードにリズムをつけたような洒落たアプローチで演奏してみせる。

- ムーン・ラブ

知らずに聴いたらジャズのスタンダードと思うひとも多いだろう。チャイコフスキーの曲だが、これはそれだけメロディがジャズ的な流れで書かれているということだ。キューンはこの曲を無理なく4ビートに乗せている。メロディックな要素とラインによるフレーズをほどよくシャッフルしたソロはこのひとならではだ。ミディアム・アップのテンポもこの曲にぴったりで、それも幸いしてキューンの魅力が全開される演奏になった。中盤のフィンクによるベース・ソロもつぼにはまった内容だし、最後にはわずかだがビリー・ドラモンドとキューンの小節交換もフィーチャーされる。

- ワン・レッド・ローズ・フォーエヴァー

一言にして自分の世界を表現してしまう演奏家や歌手がいる。それだけ個性的ということだが、この演奏には最初の音を聴いただけで胸がときめいた。キューンはメロディの纏りかたが抜群に巧い。加えて和音の構成が独特で、それがいい味に結びついている。そんなことをしみじみと思わせてくれる演奏だ。中盤のフィンクによるベース・ソロは思索的で、その後に登場するキューンのプレイと絶妙なコントラストを描く。

- 白鳥の湖

誰でも知っているクラシック曲をジャズ化するのは難しい。その反面、やりがいもあるのだろう。キューンはこの曲をミディアム・アップのテンポで、しかも少しメロディを崩した形で演奏してみせる。味付けはスイング感とブルージーな音使いだ。それによって、彼はこの名曲を個性豊かなジャズ・チューンに変身させた。“めくるめく”という言葉がびっつりの、乗りのいい演奏である。

- 夜想曲変ホ長調 作品9 第2番

ショパンのノクターンだが、非常に無理のないジャズ化が図られている。そこがキューンのセンスのよさだ。ショパンが書いたノクターンの中で、というよりあらゆるノクターンの中でもっともポピュラーな1曲である。それというのも、映画『愛情物語』のテーマ曲として使われて以来、クラシックだけでなくジャズやポピュラー音楽の演奏家によっても取り上げられるチャンスが多くなったからだ。キューンはこの曲を眩くように、囁きかけるように弾いていく。その静寂な響きが、却って聴くもののイマジネーションを描き立てる。

- リベリイ

ドビュッシーの曲だが、これもジャズ・ミュージシャンがわりとよく取り上げる。メロディ・ラインが持つリズムを増幅させたようなタッチが心地よい。スマートで都会的な演奏になっているところもキューンならではだ。ソロ・パートでは、ミディアム・テンポながら躍動感のあるビートを用いて澗刺としたタッチを聴かせてくれる。このパートだけを聴けば、多くのひとがご機嫌なジャズ・チューンと思うことだろう。

- 前奏曲ホ短調 作品28 第4番

ショパンの作品中もっとも多くのひとに親しまれている1曲。ジャズではバリトン・サクソ奏者のジェリー・マリガンによる演奏が名高いが、キューンによるこのパフォーマンスも名演のひとつに数えていい。いつも以上にパッションを込めたように感じられるテーマ・プレイが印象的だ。とは言え、そこはキューンである。決して思い入れたっぷりな表現にならず、さりりとした中に重厚さも加味したタッチが見事だ。

- フル・ムーン・アンド・エンプティ・アームズ

ラフマニノフの曲はどれも難しい。それだけにジャズとして演奏する場合、たいていは小難しい解釈の羅列になってしまう。しかしキューンはそんなことに陥らない。ここでもご機嫌な4ビート・ジャズが展開される。どこからどう聴いてもジャズそのものだ。解釈の力もさることながら、これは表現力がおおいにものを言った演奏である。そんなことができるのも、さまざまな経験を積み重ねてきたキューンだからこそだ。終盤ではベースとドラムスの掛け合いも登場する。

- パヴァーヌ

モリス・ラヴェルが書いた「亡き王女のためのパヴァーヌ」とよく混同されるのがこの曲で、こちらはラヴェルの先輩にあたるガブリエル・フォーレが作曲したもの。“パヴァーヌ”なら本家本元がこちらだ。元を正せば小管弦楽のために書かれた曲で、幻想的な世界がキューンのピアノによって纏られていく。哀愁を湛えたメロディは彼の端正なタッチと絶妙な相性を示す。テーマが終わるとすぐにフィンクのベース・ソロになるが、これもメロディを巧みに用いた内容が光る。

- ララバイ

「ハンガリー舞曲第5番」他で有名なブラームスが書いた美しい作品。この曲はどなたもご存知だろう。それをキューンはソロ・ピアノで独特のアクセントを使いながら静かに弾いていく。無垢な美しさでも表現すればいいだろうか。心を洗われるような清々しさがいつまでも余韻を引く。

[[c]WINGS 05122345 : 小川隆夫/TAKAO OGAWA]

いまではすっかりジャズ・ピアノの人気者になってしまったが、スティーヴ・キューンと言えば、かつては地味なピアニストの代名詞だった。実力には昔から定評があったものの作品に恵まれなかったせいだ。しかし日本のヴィーナスからアルバムを発表するようになって、彼はおそらく自分も気がついていなかった魅力的な持ち味を発揮するようになった。

キューンに限らず、エディ・ヒギンズやクロード・ウィリアムソンなど、このレーベルからアルバムをリリースすることで、それまでの過小評価に決着をつけたプレイヤーは少なくない。レーベルのオーナーでプロデューサーでもある原哲夫の眼力が優れているからだ。野球に例えるなら、野村克也の再生工場である。実力派に真価を発揮させる舞台をセッティングする。この点にかけて、ヴィーナスほど見事な手腕を発揮するレーベルはない。

キューンは、随分以前から堅実な活動を行ってきた。作品もそこそこは残している。内容にも創造的なものが多く、立派な実績を積み重ねてきたミュージシャンのひとりだ。しかし残念なことに、人気の面でいまひとつぱっとしたものがなかった。

堅実ゆえに、あるいはコマシャールイズムに背を向けてきたからこそ、大きな話題を呼ばなかったとも言える。考えようによっては、キューンの過小評価は彼にとつての勲章かもしれない。

1938年4月24日にニューヨーク州ブルックリンで生まれたキューンは、5歳でピアノのレッスンを始め、13歳のときにはボストンのダンス・バンドで演奏していた。学業も優秀だったらしく、1959年にハーバード大学を卒業している。

一方でプロのミュージシャンとなる夢も捨て切れず、卒業と同時にケニー・ドーハムのグループに参加する。そこでの演奏が認められ、一時はジョン・コルトレーン・カルテットでマッコイ・タイナーに代わってピアノの席に座ったこともあるほどだ。次いでスタン・ゲッツのグループに迎えられたが、1964年にアート・ファーマーの結成したカルテットに誘われ、ここに1966年まで在籍した。

ファーマーのカルテットでスウェーデンに楽旅したことがきっかけとなって、キューンはグループを退団する。そのまま1967年から1971年まで同地で活躍したのち、ニューヨークに戻って自己のグループや、ファーマー、ゲッツなどかつてのリーダーの元でも演奏を行なう。

1979年にシンガーのシーラ・ジョーダンと結成したグループは、キューンの経歴の中でも大きな脚光を浴びたもののひとつだ。しかしこのグループでも創造的な音楽性を前面に打ち出したため、一般的なガビュラリティには結びつかなかった。

ところで、白人ピアニストと言えば、真っ先に思い浮かぶのがビル・エヴァンスだ。彼に代表される内省的なピアノ・スタイルをキューンも持ち合わせている。ただし、独特のリリシズムを表現することで印象的なプレイを示したエヴァンスに対し、ロマンティックな部分を極力排して創造的な世界を追求してみせたのがキューンだ。

それが災いしたのか、キューンのプレイには難解なイメージがついて回る。ところが1966年に録音した『10月組曲』(インバルス)や、同じ時期にサイドマンとして参加したアート・ファーマー・カルテットの作品などからは、エヴァンスとは異質ながら心安らく叙情的なプレイも追求されていた。

こうした叙情的な部分は、1990年代以降、キューンが積極的に示すようになった要素だ。とくにヴィーナスから発表される諸作では、かつての研ぎ澄まされた緊張感に代わってハート・ウォームなタッチが大きな魅力になっている。

それはキューンが相応の年齢になり、円熟したことによって生み出される表現かもしれない。しかし元を辿れば、彼はこうしたタイプの演奏でデビューしたのである。そのことを考えると、ここにきてキューンが本音でピアノを弾くようになったとも解釈できる。

この作品では、クラシックの小品をいかにもキューンらしい繊細で叙情味に溢れた表現で聴かせてくれる。これぞまさしく彼の持ち味を好ましい形で発露させた1枚だ。こうしたレコーディングを企画したヴィーナスのセンス、そしてそれをもの見事に察晴らしい演奏で応えたキューンの心意気。両者の良好なチームワークがあればこそこのアルバムだ。